様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：３７１２６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１１９７６

研究課題名（和文）看護学生の自己超越及び成長に関する理論的モデル検証と教育的支援策に関する研究

研究課題名（英文）Self-Transcendence and Well-being in Undergraduate Nursing Students in Japan

研究代表者
星　美和子（HOSHI, Miwako）

福岡女学院看護大学・看護学部・教授

研究者番号：７０４３３１３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、宗教的背景を持つ大学の看護学部、宗教的背景を持つ大学の文系学部、そして宗教的背景のない大学の看護学部の大学生を対象に調査を実施し、自己超越理論をもとに構築した理論的枠組みの検証を行った。合計920名から有効回答を得て分析したところ、自己超越性は、うつ、自己効力感、自尊感情、そして感情知能と相関関係があるという結果を得られた。これまでの研究結果同様、自己超越性は、大学生においても特に精神面でのウェルビーイングに影響を及ぼすことが明らかになった。また、大学の宗教的背景の有無や、学部の違いをもとに比較した結果から、自己超越性及びウェルビーイング指標に差異があることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　自己超越性は、人間の成長における成熟性の特徴の一つであり、自分のそれまでの限界や視野を広げる力と定義されている(Reed, 2014)。本研究では、人間を全人的に理解するために人としての成長が求められる看護大学生を対象に、ウェルビーイングを促進することを最終的な目的として、自己超越性に関する検証を行うとともに、文系学部生との比較を行った。また、自己超越性は、宗教的信仰を含む個人が持つ信念が影響すると言われていることから、宗教的背景を持つ大学の学部生と宗教的背景のない大学の学部生との比較も行った。これら異なる対象群の比較は、自己超越性の研究においては学術的にも初めての試みであった。

研究成果の概要（英文）：　This study examined the relationships between self-transcendence and well-being variables for three groups of undergraduate students recruited from a private Christian and a public university. Participants were 920 students including nursing majors (n = 376) and liberal arts majors (n = 382) of the private Christian university and nursing students (n = 162) of the public university, respectively. Results of the correlation analyses demonstrated medium to large correlation coefficients between psychosocial self-transcendence and well-being variables such as depression, self-efficacy, and self-esteem. Additionally, spiritual self-transcendence was found to have positive correlations with self-efficacy and self-esteem. Moreover, the results of analyses of variance showed significant differences in the level of self-transcendence and well-being among the three groups. Results of this study revealed a salutary effect of self-transcendence on well-being of the undergraduate students.

研究分野：看護学

キーワード：看護大学生　大学生　成長　自己超越性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

(1)　人間の成長や発達に関する学術的研究から、自己超越性という概念が規定され、自己超越性が人間の主に精神面での成長や健康維持に有益な影響をもたらすことが数十年前より明らかになっている（Erikson,1986；Frankl, 1963)。また、看護学から生まれた中範囲理論として、自己超越理論が Reed（1991 によって提唱されている。この理論では、「人間は困難な状況に置かれ、自身の脆弱さを感じることで自分の限界を自覚するが、この脆弱さが刺激となって、生まれながらに人間に備わっている能力である自己超越性が覚醒し、自己のそれまでの能力の限界や世界観を拡張すること（つまりは、今までの自己を超越すること）によって、弱さを克服し困難を乗り越え、より良い状態であるウェルビーイングへ導かれ成長する」とされている。

(2)　自己超越理論は、中学生を含む思春期の若者から高齢者、がん患者や HIV/AIDS 患者及び慢性疾患を持つ患者、そして介護者や看護師など幅広い対象において理論検証が行われ、理論の妥当性と信頼性に関する研究結果が明らかになっている（Coward, 2014；金井, 2015；Reed, 2009)。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、人間の内的成長を促進する概念である自己超越性に焦点を当て、看護大学生が大学生活や臨床実習等で直面する様々な困難や課題について、それを乗り越え、それまでの自己の限界を広げ（自己を超越して）成長する過程と、その過程を促進し影響を与える因子について、構築した理論的枠組みの検証を行うことで明らかにすることである。具体的には、自己超越性とウェルビーイング、そしてその過程に影響を与える個人的因子の関係性について明らかにすることである。

また、自己超越性の側面のひとつである「超個人的」な自己超越性は、科学的な検証のできない宗教的な信仰など、個人が持つ信念が影響する。そのため、本研究では、宗教的背景を持つ大学の看護学部と文系学部の大学生、宗教的背景のない大学の看護学部の大学生を対象に自己超越性について比較し、相違を明らかにすることについても目的とする。

３．研究の方法

(1)　研究デザイン

本研究の研究デザインは量的記述的研究である。

(2)　研究対象

宗教的背景を持つ大学の看護学部、宗教的背景を持つ大学の文系学部、そして宗教的背景のない大学の看護学部、それぞれ１校における大学生を対象に調査を実施した。

(3)　調査項目

本研究における調査項目及び使用した質問紙は以下の通りである。尚、本研究で使用する研究代表者が開発した以外の質問紙については全て使用許可を得ている。

①　対象者の属性

対象となる大学生の属性を知るため、年齢、大学、学部その他を調査項目とした。

②　自己超越性

心理社会的自己超越性については Japanese Self-Transcendence Scale（JSTS）を、またスピリチュアルな自己超越性については Japanese Spiritual Perspective Scale（JSPS）を用いた。どちらも本研究の対象者に合わせて項目を修正・追加し、JSTS は全 17 項目（得点可能範囲 4-68)、JSPS は全 21 項目（得点可能範囲 21-126）とした。

③　ウェルビーイングと個人的因子

本研究では文献検討の結果から、大学生のウェルビーイングの指標として、自尊感情、自己効力感、うつを用いた。自己効力感と自尊感情が高いほど、そしてうつの傾向が低いほどウェルビーイングな状態であると評価する。

自尊感情については山本・松井・山成(1982)らが翻訳した自尊感情尺度を用いた（全 10 項目、得点可能範囲 5-50)。自己効力感については、General Self-Efficacy Scale (Schwarzer & Jerusalem, 1995）の日本語版（全 10 項目、得点可能範囲 4-40）を用いた。うつについては、Patient Health Questionnaire（PHQ-9）（Spitzer & Williams, 2001）の日本語翻訳版である「患者さんの健康に関する質問票-9」（全 9 項目、得点可能範囲 4-36）を用いた。さらに、個人的因子としては、過去の研究代表者の研究結果から、情動知能（Emotional Intelligence）を選択し、豊田と山本（2011）の日本版 Wong and Low Emotional Intelligence Scale（WLEIS）（全 16 項目、得点可能範囲 7-112）を使用した。

(4)　データの収集方法と手順

研究代表者の所属施設の研究倫理委員会の承認を受けた後、宗教的背景を持つ大学の看護学部、宗教的背景を持つ大学の文系学部、そして宗教的背景のない大学の看護学部に研究協力を依頼した。対象者の抽出については恣意的標本抽出法を用いた。対象者への調査票配布は、研究責任者や研究分担者、研究協力者、または協力を得られた大学の事務職員が行った。調査

票の回収は、研究協力施設に１か月程度回収箱を設置して回収し（ただし回収率の低い施設においては、最大で３か月ほど延長して回収箱を設置した）、対象者が自由意志で投函できるようにした。

(5)　データの分析方法

収集したデータは、記述統計を用いて対象やデータ全体の概観や分布を確認後、各質問紙の信頼性について確認をした。その後、自己超越性、ウェルビーイング及び個人的因子の関係性についてピアソンの相関係数を用いて分析した。また、大学や学部の相違による比較のために一元配置分散分析を行った。

４．研究成果

(1)　対象者の概要

計 922 名の大学生から回答を得た（有効回答数 920）。対象となる大学生の年齢範囲は 18 歳から 43 歳であり、平均年齢は 20.4 歳（SD＝1.8）であった。その他の対象者の属性については表１に示す。

対象者のうち、信仰している宗教があると回答した大学生は 115 名（12.5%）、ないと回答した大学生が 797 名（86.8%）であった。尚、宗教的背景を持つ大学についてはいずれも女子大学であり、またこの対象群においては男性が 0.1%であることから、本研究では女性のみを分析の対象とした。

表１．対象者の属性（N=920）

項目		度数（%）
性別	女性	916（99.9）
	男性	4（0.1）
大学生	宗教的背景を持つ大学の看護学部生	376（41．0）
	宗教的背景を持つ大学の文系学部生	382（41.6）
	宗教的背景のない大学の看護学部生	162（17.2）
学年	１年次生	183（19.9）
	２年次生	233（25.4）
	３年次生	269（29.3）
	４年次生	231（25.2）

(2)　各変数の記述統計結果

本研究の理論的枠組みの構成概念である各変数の記述統計結果については表２に示す。

表２．各変数の得点範囲、平均値、標準偏差（N=916）

変数	得点範囲	平均値（標準偏差）
自己超越性		
JSPS	31-116	68.9（15.09）
JSTS	23-155	47.52（8.38）
自尊感情	15-45	32.4（3.57）
自己効力感	10-40	25.9（5.44）
うつ	9-36	15.3（4.93）
感情知能	24-110	75.6（11.70）

(3)　各変数間の相関関係

自己超越性とウェルビーイング並びに自己超越性と感情知能の関係については、ピアソンの相関係数を用いて分析を行った。

①　自己超越性とウェルビーイング

心理社会的な自己超越性については、うつとは負の、自尊感情と自己効力感とは正の有意な相関がみられた（うつ r＝-0.31、自尊感情 r＝0.20、自己効力感 r＝0.48、いずれも p<0.05）。

また、スピリチュアルな自己超越性については、うつとは有意の相関がないが、自尊感情（r＝0.14、p<0.05）と自己効力感（r＝0.18、p<0.05）において正の有意な相関がみられた。

②　自己超越性と感情知能

自己超越性と感情知能については、心理社会的な自己超越性と特に強い正の相関（r＝0.54、p<0.05）が見られた。スピリチュアルな自己超越性についても、正の有意の相関（r＝0.21、p<0.05）があった。

(4)　宗教的背景の有無や学部による差異

宗教的背景を持つ大学の看護学部の学生、宗教的背景を持つ大学の文系学部の学生、そして宗教的背景のない大学の看護学部の学生について、一元配置分散分析を用いて、自己超越性、ウェルビーイング、個人的因子の比較を行った。その結果、スピリチュアルな自己超越性において差異はなかったが、心理社会的な自己超越性において有意な結果が得られた（F(2、875)＝4.3、p＜0.05）。Tukey HSD による多重比較によると、同じ宗教的背景を持つ大学における看護学部生と文系学部生の間で有意な差が認められた。つまり、宗教的背景を持つ大学の看護学部生（M＝48.5、SD=14.83）の方が、宗教的背景を持つ大学の文系学部生（M＝46.8、SD＝8.13）よりも、心理社会的な自己超越性の得点が有意に高いという結果であった。

ウェルビーイングの指標では、うつ（F（2、896）＝4.1、p<0.05）と自己効力感（F（8、887）＝9.3、p<0.05）及び感情知能（F（2、895）＝7.3、p<0.05）において有意な結果が得られた。うつについて Tamhane による多重比較では、宗教的背景を持つ大学の看護学部生（M=14.8、SD＝4.37）よりも、宗教的背景を持つ大学の文系学部生（M=15.8、SD=5.29）の方が有意に得点が高いという結果であった。また、自己効力感と感情知能については Tukey HSD の多重比較を行

ったところ、宗教的背景を持つ大学の看護学部生（自己効力感 *M*＝26.6、*SD*=5.08、感情知能 *M*＝77.0、*SD*=10.96））の方が宗教的背景のない大学の看護学部生（自己効力感 *M*＝24.4、*SD*=5.24、感情知能 *M*＝72.6、*SD*=11.84））よりも、得点が有意に高いという結果であった。

本研究は 3 つの大学の大学生を対象として、自己超越性について明らかにすることを中心に検証を行った。過去の研究結果と同様に、大学生においても、心理社会的な自己超越性については、精神的なウェルビーイングに有益な影響を与える可能性があることが示唆された。また、スピリチュアルな自己超越性についても、自尊感情や自己効力感に影響があることが示唆された。また、宗教的背景を持つ大学の看護学部生が、宗教的背景を持つ大学の文系学部生や宗教的背景のない大学の看護学部生よりも、うつ傾向が低く、自己効力感や感情知能が高いという結果が得られた。今後は、本研究を詳細に分析するとともに、看護大学生だけではなく大学生の精神面の健康を保持増進し、自己超越性を高め、成長を促進するための効果的な支援についても検証を進めていくことが必要である。

【引用文献】

・患者さんの健康に関する質問票－9（PHQ-9）Retrieved 06/ 01/2019 from https://www.phqscreeners.com/sites/g/files/g10049256/f/201412/PHQ9_Japanese%20for%20Japan.pdf
・Coward, DD.(2014).Self-Transcendence Theory, In Alligood, MR. Nursing Theorists and their Work (8th Ed.). St. Louis, MI: Elsevier
・Erikson, E.H. (1986). *Vital Involvement in Old Age*. New York; Norton
・Frankl, V.E. (1963). *Man`s Search for Meaning*. New York: Pocket Books
・Ito, K., Schwarzer, R., & Jerusalem, M. (2005). Japanese Adaptation of the General Self-Efficacy Scale.
・Kroenke, K., Spitzer, R, L, & Williams, J.B. (2001). The PHQ-9; Validity of a Brief Depression Severity Measure. Journal of General Internal Medicine, 16(9), 606-613
・Law, K.S., Wong, C. S., & Song, L.J. (2004). The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology, 89*(3), 483-496
・Reed, P.G. (1991). Toward a theory of self-transcendence: Deductive reformulation using developmental theories. *Advances in Nursing Science*, 13(4), 64-67
・Reed, P.G. (2009). Demystifying Self-Transcendence for Mental Health Nursing Practice and ・Research. *Archives of Psychiatric Nursing, 23*(5), 397-400
・Reed, P.G. (2014). The Theory of Self-Transcendence. In Smith, M.J. & Liehr, P.R. *Middle Range Theory for Nursing*, (pp.109-140). New York: Springer
・Schwarzer, R., & Jerusalem, M. (1995). Generalized Self-Efficacy Scale. In Weinman, J., Wright, S., & Johnston, M., Measures in health psychology: A user`s portfolio. Causal and control beliefs (pp.35-37). Windsor, UK: NFER-NELSON
・豊田弘司・山本晃輔.(2011).日本版 WLEIS（Wong and Law Emotional Intelligence Scale）の作成．教育実践総合センター研究紀要，20，7-12

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Takumi Yoshino, Miwako Hoshi, Maki Fujikawa, Misako Yoshitake
２．発表標題 Leverl of Self-Esteem and Contributive Factors in Japanese Undergraduate Nursing Students
３．学会等名 Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 44th Biennial Convention（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Misako Yoshitake, Maki Fujikawa, Takumi Yoshino, Miwako Hoshi
２．発表標題 The Meaning of "Human Caring"from Nursing Students' Perspectives after the First Clinical Practice
３．学会等名 Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 44th Biennial Convention（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Miwako Hoshi, Maki Fujikawa, Takumi Yoshino, & Misako Yoshitake
２．発表標題 Self-Transcendence and Well-Being ofJapanese Undergraduate Nusing Students; A Cross Sectional Study
３．学会等名 Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 45th Biennial Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Maki Fujikawa, Miwako Hoshi, Misako Yoshitake, & Takumi Yoshino
２．発表標題 Effects of Simulation on Promoting Caring Ability of Japanese First-Year Undergraduate Nursing Students
３．学会等名 Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing 45th Biennial Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉武　美佐子 (Yoshitake Misako) (50320388)	福岡女学院看護大学・看護学部・准教授 (37126)	
研究分担者	藤川　真紀 (Fujikawa Maki) (30570121)	福岡女学院看護大学・看護学部・講師 (37126)	
研究分担者	吉野　拓未 (Yoshino Takumi) (50711917)	福岡女学院看護大学・看護学部・講師 (37126)	
研究協力者	ジョー　メリッサ (Dyo Melissa)		
研究協力者	渡邉　由加利 (Watanabe Yukari)		